様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　6 日現在

機関番号：２４２０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2013
課題番号：22560620
研究課題名（和文）フィリピンにおけるスペイン植民都市の起源・変容・保全に関する研究
研究課題名（英文）STUDY ON ORIGIN, TRANSFORMATION AND CONSERVATION OF SPANISH COLONIAL CITIES IN PHILIPINNES
研究代表者
ヒメネス　ベルデホ　ホアン　ラモン（JIMENEZ VERDEJO JUAN RAMON）
滋賀県立大学・環境科学部・准教授
研究者番号： 10525281

研究成果の概要（和文）：スペイン人によるフィリピンの都市の作成、都市計画のメソッドを定義しました。3 つの主要都市の進化に重点をおきました（1)マニラ 1571 年,(2)セブ 1565 年、(3)ヴィガン 1572 年と(4)フィリピンの文化遺産建造物の現状。

研究成果の概要（英文）：Definition of the method of urban planning for creation city used by the Spanish in the Philippines, focused on the evolution of the main three cities (1) Manila 1571, (2) Cebu 1565, and (3) Vigan 1572 and (4) the current status of cultural heritage buildings in the Philippines

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学・都市計画・建築計画
キーワード：スペイン植民都市、フィリピン、グリッド都市、都市の形成、遺産保全、マニラ、セブ

１．研究開始当初の背景

本研究の遂行過程で，セビーリャ Sevilla のインディアス古文書館(Archivo General de Indias（AGI））に収蔵された植民都市関連地図資料全 7,152 枚をマイクロフィルムの形で，またマドリード Madrid にある陸軍博物館資料 Servicio Histórico Militar（SHM）と Servicio Geográfico del Ejercito（SGE）の地図資料全 1514 枚（全 10 巻）を手に入れている[注1)]。

２．研究の目的

本研究は、スペイン人によるフィリピンの都市の作成、都市計画のメソッドを定義しました。フィリピンのスペイン植民地時代の都市の変容、フィリピンにおけるスペイン植民地時代の都市の遺産保全のための拠点。

３．研究の方法

本研究では，フィリピンの首都マニラ Manila，セブ、ヴィガんに焦点を当てる。古地図をもとにマニラの都市形成についてまとめた上で，臨地調査に基づいて，現状の施設分布等を明らかにし，街路体系，街区構成，そして敷地割りを中心にその特質を明らかにする。スペイン植民都市として建設されたセブ[注2)]やヴィガン[注3)]なども含めて，他のスペイン植民都市との比較が大きな視点となる。

４．研究成果

(1)マニラ(1571)

スペイン植民都市の中で城壁を建設したのは14都市しかないが,その中でマニラは11番目の都市である。サント・ドミンゴ（イスパニョーラ島,1494 年）[注11)]，ハバナ（1515 年）は,必ずしもグリッド・パターンではないが,整然としたグリッド・パターンの街区割をしている。パナマ（1519 年）,ヴェラクラス（1519 年）のような先行事例はあるが,1573 年のインディアス法（「フェリペⅡ世の勅令」）によって,植民都市計画が体系化される直前の事例である。すなわち,マニラは初期スペイン植民都市の 16 世紀を代表するひとつのモデルと考えることができる。

本研究はが明らかにしたことをまとめると以下のようになる。

①イントラムロスの街路体系は，建設初期から,以下を除いて,ほとんど変化がない。街区が大きく変化したのは，スペイン統治時代において,パリアンの市場を建設した際で，サンティアゴ要塞付近の街区については無くなった街区がある。アメリカ統治時代において，パシグ川沿いの城壁が一部取り壊され，その近辺の街区が一部変化している。

②初期の中央広場周辺の街区は，街路の中心間は東西南北 100vara×100vara（芯々）のグリッド（1 ヴァラ vara[注i)] ＝0.8359m），街区は東西南北 90vara×90vara，街路幅員は 10vara で計画された。この基準寸法は，ルソン島の世界遺産都市ヴィガンと同じである。中央広場も 100vara×100vara（芯々）で計画されているが,これはインディアス法の規定とは異なっている。

③マニラ・イントラムロスのユニークな点は,もうひとつ,長方形街区が計画されていることである。長方形街区は,東西南北 90vara×150vara で計画されたと考えられる。

④建築物の建設年代から，教会，修道院，市庁舎，病院などの公共の施設は中央広場周辺とイントラムロスの周辺街区に多く建設された。イントラムロスの中央部，南東側の長方形街区には個人の店舗や住居が建設されていたと考えられ，この分布は現在も同じである。

⑤宅地割の奥行きは，各街区を東西（北西―南東)に 2 分割した 45vara が基本である。この奥行きの分割線は現在も宅地割の境界線として残されている。

以上,マニラ・イントラムロスの現在の空間構成は,第二次世界大戦によって大きく破壊されたにもかかわらず,初期スペイン植民都市の空間構成をその骨格において今日に伝えるものと考えることができる。

(2) セブ(1565)

スペイン植民都市としてのセブの都市計画について，すなわちセブの初期都市計画について，その特徴をまとめると以下のようになる。

①セブは，アジアにおける最初のスペイン植民都市であるが，数年にして，マニラが中心拠点とされることになったため，その都市計画は完全なかたちでは実施されることはなかった。また当初の計画図も残されていない。

②当初の計画が窺えるのが 1699 年の図である。これによると，スペイン植民都市の特徴とされるグリッド状の街区パターンが意識されていることが分かる。そして，両図から，当初から 18 世紀末頃までは当初のシウダードの範囲が市域として維持されてきたと考えられる。

③1699 年の図は，当初の計画概念と実態をよく示している。各街区の所有者を詳細に見ると表１のようになる（便宜上街区に番号をふった。図 3b とは南北が逆である)。第一に，街区は基本的に 2×2 に 4 分割され，敷地は街区の１/4 を単位にしていることがわかる。民有地についてみると，所有者の固有名詞が書かれており，その身分も記されている。長官 Capitan は４名記載があるが，ほとんどが複数の土地を所有している。また，女性名が多いのが目立つ。

④一方，現況と照らし合わせて，図 3bc が表すような正確な測量に基づいた街区割りが実際にはなされたとは考えられない。

レガスピがセブ島に到達した段階でフェリペⅡ世のインディアス法[注ii)]（1573 年）は集大成されてはいない。カリブ海，ラテン･アメリカにおける最初のスペイン植民都市で

あるサント・ドミンゴの形成過程について別研究[注iii)]で明らかにしたが，要塞と海の関係など都市の立地，方位，広場を中心とした主要施設の構成など，サント・ドミンゴとセブはよく似ている。セブの都市建設はサント・ドミンゴとは4半世紀のタイムラグがあるが，ほぼ同様にスペイン植民都市の最も初期の段階における都市計画がなされたと考えることができる。ただ，セブは，上述のように数年で拠点都市としての役割を失うので，サント・ドミンゴのように城壁を建設に至るその後の展開はみられない。

⑤セブの中心街区の街路寸法，街区寸法を検討するために，街路中心間の寸法を測ると図７のようになる。明快な基準寸法を見出すことはできないが，広場の各辺は143.72m,104.20m.137.38m，109.15m である。オリジナル・グリッドと考えられるブルゴス，ラプ・ラプ，クエンコの各南北通りと，マガリャンイス，オスメナ，レガスピ，ウルダネータ，ヘレスの各東西通りで構成されるグリッドをみると，東西は 107.50m～87.78m，108.29m～100.92m，南北は 97.24m～87.84m，105.16m～84.52m，95.13m～93.97m，118.99m～109.15mの範囲である。1 ヴァラ varas＝0.8359m として換算すると，街区は最大143.34 ヴァラ～最小 101.11 ヴァラ，広場については，当初の規模は不明と言わざるを得ないが、125 ヴァラ×１７２である。広場の規模は，都市図の残されたスペイン植民都市全体についてみると，124 ヴァラ×124 ヴァラが最も多い標準であることがわかっている[注iv)] サント・ドミンゴの中央広場と同様セブの中央広場も規模はほぼ同じように設定されたと考えられる。街区については，サント・ドミンゴでは，時代が下ると 100 ヴァラ（芯々）となるのであるが，セブの場合，はっきりしない。新たな市街地計画が行われなかったからである。

⑥マニラとの詳細な比較は，方位は異にするけれど，川で区切られた島状の立地，要塞と広場の位置関係，カテドラル，総督邸の配置などよく似ている。マニラの場合，城壁で完全に囲われ，セブよりはるかに整然とした街区割りがなされている。マニラを完成形とすれば，セブはそのエチュードと位置づけることができるであろう。

(3)ヴィガン(1572)

ヴィガンの街区体系・街区構成に関する以上の考察をまとめると以下のようになる。

①ヴィガンの建設が開始された 1572-74 年は、フェリペⅡ世のインディアス法の出された 1573 年と同時期である。このインディアス法は 16 世紀初頭からの植民統治経験の集大成である。従って、フィリピンに 1573 年の法が即座に伝わらなかったとしても、スペイン植民都市の構成原理が何らかの形で用いられた可能性は高い。

②ヴィガンの場合、プラサを近接して二つ持っており、中南米で一般的な中央にプラサ・マヨールを持つ都市とは異なる。しかし、インディアス法も港湾都市の場合は港に接して広場を設けるとしており、広場の規模やプロポーションも逸脱しているわけではない。

③現状の街路幅、街区規模のばらつきは大きいが、旧市街の街区規模が 80m～85m の正方形をしていることが注目される。スペイン植民都市で用いられた単位ヴァラを元にすると、街区は心々で 100 ヴァラ四方、街路幅は 10 ヴァラとしていたと考えられる。

④各街区がどのように宅地分割されていたかについて、現況の宅地割りをもとに考察すると街区の各辺は3分割される例が多く 3×3 のナイン・スクエアの分割が基本であったことが考えられる。寸法体系としても、100 ヴァラから街路幅の計 10 ヴァラを引いた 90 ヴァラを三分割した 30 ヴァラ×30 ヴァラの宅地に分割する計画理念は考えやすい。

⑤しかし、中南米の植民都市の場合、2×2 の 4 分割が基本となっており、40 ヴァラ×40 ヴァラもしくは 20 ヴァラ×20 ヴァラ（１ロアン）が単位となった可能性もある。

以上，セブの歴史的都市核について，残されている地図をもとに都市形成過程を明らかにし，さらに臨地調査によって空間構成の現況を明らかにすることで，その特性を明らかにした。特に，その初期の都市計画の特性を明らかにした点が本研究の中心である。残念ながら，特にパリアンにおける変化は激しく，かつてのバハイ・ナ・バトは上述のように２軒しか残っていない。また，川の周辺は環境条件が劣悪となり，居住環境の改善も喫緊の課題となっている。以上の分析が歴史的な特性を生かした地区の環境改善の一助になることを期待したい。

(4) 文化遺産建造物

フィリピンの文化遺産建造物の多くは、3 世紀もの間続いたスペイン植民地時代（1571 年～1898年）に建築された。919の教会、432 公共施設（城壁、軍隊施設）、また多くの住

宅が残されている。
フィリピンの文化遺産建造物の現状：
- フィリピンの有形文化遺産建造物は総じてよくは知られていない（専門家間において）。
- 各文化遺産建造物の詳細なドキュメンテーションがない。
- スペインでもフィリピン研究を行っている人は多くない。
- 世界遺産の暫定リストの数が多い。国として文化遺産を保護する意思はあるが、優先順位が見えにくく、長期的視点が見えにくい。活動が分散されていて、経験・技術が蓄積していない。
- 人々の認識が向上すれば、遺産として認識される可能性を持つ歴史的建造物が多い。外部の人間との接触により、自分の文化遺産の認識を高める必要がある。
- 遺産保護の際に、各民族固有の歴史にも配慮する必要がある。
- 保護のための枠組みはあるものの、地方行政との連携が保護の鍵となるが、執行は地方の政治状況に依存している。
- 現地の治安状況と文化遺産の保護状況把握が関連している。近年の治安回復により立ち入れる地域が広がり保護が必要とされる文化遺産が増えている。今後の治安の回復状況によってはこの傾向は続くと考えられる。
- 文化遺産保護に対する教育部門が立ち遅れている。（大学は多いが専門的知識を学べる大学が少ない）。フィリピンの大学で建築の保存を教えている大学は約2校で、不足している。
- 全体的に防災対策があまり見られない。
- 歴史的建造物の保護を担う関係者（役場の関係者、家主、建築家および改修関係者）への専門知識の不足。
- 木造の建物の材質研究が進んでいない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
- 塩田 哲也,J.R ヒメネス ベルデホ，布野 修司,イントラムロス（マニラ）の形成と街路体系に関する考察 イントラムロス（マニラ）の形成と街路体系に関する考察， 日本建築学会計画系論文集，77 巻,681 号,2545 頁 ～ 2552 頁

- J.R ヒメネス ベルデホ，布野 修司,セブ市（フィリピン）の都市形成とその都市核の空間構成に関する考察， 日本建築学会計画系論文集，76 巻,668 号,1867 頁 ～ 1874 頁， 2011 年， 共著， ヒメネス ベルデホホアンラモン，布野修司， 共同（主担当）

- 〔学会発表〕（計 15 件）
- Juan Ramon Jimenez Verdejo, Consideration on the Formation of the Parian of Manila. Proceedings of the 9th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA), Gwang-Ju, Korea，22ｔｈ－26th, Nov. 2012

- 梅谷 敬三,Juan Ramon Jimenez Verdejo, Considerations on the Urban Formation of Binondo and San Nicolas District in the City of Manila. Proceedings of the 9th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA), Gwang-Ju, Korea, 22ｔｈ－26th, Nov. 2012
- J.R ヒメネス ベルデホ、パリアン（マニラ）の形成に関する考察、日本建築学会 2012 年大会学（名古屋）8 月

- 平沢 陽、J.R ヒメネス ベルデホ、フィリピンにおける都市空間構成に関する研究 その 4 マニラにおける Daniel H Burnham の都市計画、日本建築学会 2012 年大会学（名古屋）8 月

- 梅谷 敬三、J.R ヒメネス ベルデホ、フィリピン・マニラにおける都市空間構成に関する研究 その３ サン・ニコラス，ビノンドの施設分布、日本建築学会 2012 年大会学（名古屋）8 月

- 山口 健太，J.R ヒメネス ベルデホ*，布野 修司，5500 フィリピン・セブ島における教会建築様式に関する研究，日本建築学会 2011 年大会学（関東）8 月

- 上西 慎也，J.R ヒメネス ベルデホ*，布野 修司，7362 セブ市（フィリピン）の都市形成に関する考察，日本建築学会 2011 年大会学（関東）8 月

- 塩田 哲也、梅谷 敬三、J.R ヒメネス ベルデホ*，正会員 布野 修司，7360 フィリピンにおける都市空間構成に関する研究 その２ カビテの都市形成および施設分布，日本建築学会 2011 年大会学（関東）8 月

- 塩田　哲也、梅谷　敬三, J.R ヒメネス ベルデホ*, 正会員 布野 修司, 7359 フィリピンにおける都市空間構成に関する研究 その 1　イントラムロスの都市形成および施設分布, 日本建築学会 2011 年大会学（関東）8 月

- 山田田聖・飯田敏史・山口健太・ヒメネス ベルデホホアン ラモン・布野修司, 7269 フィリピンにおけるスペイン植民都市の形成と変容に関する研究　その 1 セブ市パリアン, シウダード地区を中心とした建物分布, 日本建築学会 2010 年度大会（北陸）学術講演会, 富山大学, 2010 年 9 月 9 日～11 日

- 山口健太（滋賀県立大）・飯田敏史・山田聖・ヒメネス ベルデホホアン ラモン・布野修司, 7270 フィリピンにおけるスペイン植民都市の形成と変容に関する研究　その 2 ヴィガン歴史地区の建物用途の変遷, 日本建築学会 2010 年度大会（北陸）学術講演会, 富山大学, 2010 年 9 月 9 日～11 日

- 飯田敏史（滋賀県立大）・山田聖・山口健太・ヒメネス ベルデホホアン ラモン・布野修司, 7271 フィリピンにおけるスペイン植民都市の形成と変容に関する研究　その 3 ヴィガン歴史地区のバハイ・ナ・バト用途の変遷, 日本建築学会 2010 年度大会（北陸）学術講演会, 富山大学, 2010 年 9 月 9 日～11 日

- Toshifumi Iida, Juan Ramon Jimenez Verdejo, Study on Typology and Transformation of *Bahay na Bato* Housing in Vigan, Philippines. Proceedings of the 8th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA), Kitakyushu-City, 9ｔｈ－１２ｔｈ, Nov. 2010

- ホアン ラモン　ヒメネス・ベルデホ: スペインによるアジアの植民地都市建設について, メキシコ史研究ワークショップ,「メキシコとアジアの接点ーフィリピンを中心にー」, 京都ラテンアメリカ研究所主催・JCAS 地域コンソーシアム共催, 2011 年 2 月 21 日

- José María Cabeza Lainez, Juan Ramón Jiménez Verdejo, Jaime Sy, Jesús Alberto Pulido Arcas, Emilio Ramírez Juidías, Pedro Luengo Gutiérrez: REHABILITACIÓN DE LA CASA JESUITA DE 1730 EN EL PARIÁN DE CEBÚ, FILIPINAS, Jornada de Arquitectura y Cooperación al Desarrollo. Subdirecciones de Actividades Culturales e Investigación ETSAS, Seville, Spain 2010 年 10 月 21,21 日。

〔図書〕（計１件）
Shuji Funo & Juan Ramón Jiménez Verdejo グリッド都市 – スペイン植民都市の起源, 形成, 変容, 転生 THE GRID CITY: THE ORIGIN, FORMATION & TRANSFORMATION OF SPANISH COLONIAL CITIES, 京都大学学術出版会 February 2013 年、2 月

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
ヒメネス・ホアンラモン（Jimenez Juan Ramon）
滋賀県立大学・環境科学部・准教授
研究者番号：10525281

(2)研究分担者（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者（　　）
研究者番号：

注i) ヴァラは「木組，足場」に由来し，「細長い棒」を意味するが，3 ピエの長さをいう。1 ピエ=0.2786m，1 ヴァラ=0.8359m。

注ii) Ley es de Indias:インディアスと総称されたスペイン領アメリカの植民地律法の総体を指し，法源はカスティーリャ法と本国から発せられた植民地のための諸立法から成る。1573 年のフェリペ II 世によるインディアス法はこれらのうちのひとつである。17 世紀中ごろには既に 40 万件を超えており，1680 年にこれらを編纂したカルロス II 世による「インディアス法集成」が公布された。多くの不備や欠陥があり，論理的な体系を欠いていた（佐藤明夫,インディアス法,スペイン・ポルトガルを知る事典, 平凡社, pp. 50～51, 1999）。

注iii) J.R.ヒメネス・ベルデホ,布野修司, サント・ドミンゴ（ドミニカ共和国）の都市形成と空間構成に関する考察, 日本建築学会計画系論文集,2010 年 2 月,第 75 巻,第 648 号, pp.385-393

注iv) J.R.ヒメネス・ベルデホ, 布野修司, 齋木崇人, スペイン植民都市図に見る都市モデル類型に関する考察,日本建築学会計画系論文集,第 616 号 pp91-97, 2007 年 6 月